

# tab

No.  
6  
2007  
/09  
/15

木村和史  
後藤美和子  
高野五韻  
石川和広  
野村龍  
鈴木夕伽莉  
倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

野村龍：夏風の歌／01.  
石川和広：吸いこまれていった・スケッチ／02.-04.  
鈴川夕伽莉：アジアの純真／05.-06.  
倉田良成：悲哀のすすのね／07.-08.

文

木村和史：白に誘われて／09.-11.  
高野五韻：ことば以前の声／12.-13.  
倉田良成：蕉句二つ／14.-16.

あとがき集／17.-19.

画：和田彰

tab 第6号／2007年9月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



野村龍

## 夏風の歌

背中で開いたふたつの耳から

司書達の紡ぐ紫色の繭が

時雨のように染み込んで来る

この風は まるで長年馴染んだ猫だ

ちいさく鳴きながら

纏いつく 纏いつく

Rimbaud そっくりの 短い乱れた髪を手櫛で掻きあげて

そっと送り火を焚く

母さん

帰って行くのだね

翼は暖かい

まだ

飛べるかも知れない

石川和広

吸いこまれていった

夢をみている

あまりにも

風

川べりを吹いていく

橋を鳴らす

あまりにも風

まどめきれない

まどめきれないから

良い

良いから

なんだというわけではない

ぼくの尻の下に

草

ジーパンが汁で

しめっている

ぼくはひとりである

といいきって

いいものか

立ちあがって

ぼくは右手を上げて

手をふる

向こう岸には誰もいない

誰かに手をふっているみたいだろう

でも誰もいない

気がちがつているみたいだろう

誰にいつているの

誰にあいさつしているの

求めきれずに

ひとときの欲望だけが

脳裏を少し焼く

あまりにも夕焼けがきて

風が止んでしまった

空の遠くが

すこしへこんでいる

次第にうすい影が

誰かの影がさしてきた

夜であるのだろうその影は

夜であるとして

夜が

ぼくの手をにぎらず

窓から顔を出した

遠くの知らない人の

鼻に吸いこまれていった

## スケッチ

犬が走ってしまおう

どうでも

いい気分です

言葉は

ばらすためにあるのかなあ

ばらす、つまり、ばらばらにする

ばらす、つまり、本当のことを云ってしまふ

スケッチする

犬が帰ってこない

うすぐらい町に

灯りがともりはじめ

でも見えにくいので

絵をかくのは やめよう

そうだ

酒を飲みにいこうと思う

まとめないでいる

束ねないでいる

髪はほつれたままで

いそがしく働く人の姿を見ていた

その人は包丁を動かしていて

切っているのはネギで

その手で

ばらされたくないなあ

とぼくは思っている

## アジアの純真

少女はシンチグラムの撮影台に仰向けに寝ている。ごく無害な量の放射性物質を注射して、その体内分布をトンネルみたいな装置でトレースする。彼女は都合一年半にわたる悪性腫瘍の治療を終了したばかり。万が一の残存腫瘍がないか、検索するのがこの機械の役目だ。検査室のステレオがFMを流している。被験者の不安を取るためのBGMだが、病院慣れした彼女は撮影台の上ですやすやと寝息をたてている。

突如、キラキラした前奏が流れた。私の年代の者なら聴き覚えのある曲。脱力しそうな女声ボーカルがペキンベルリンダブリンリベリアと始める。ベルリンダブリンリベリアはアジアじゃないと思いつながら、誰もが韻を踏んでしまうあの曲。イランアフガン、でもバラライカも関係ないんだよ、彼女がゆっくりとトレースされていく。

シンチグラムの描く画像は控えめな点描を思わせる。集まろうか散ろうか迷うさなかの星雲にも見える。正常組織のみが描出されることを、腫瘍の残存を示唆する異常陰影の描出されぬことを、やきもき祈る身としてはまことに心細い。おまけに三十分もかかるものだから、仕方なくFMに耳を傾ける。美人、流れ出てアジアへ。彼女は治療の影響で、しばらく太陽光線に当たれない。就学しても運動会すらままならぬ。好奇心いっぱい、あまりに大人慣れした子。重病を患う子は、なぜか揃いも揃って賢い子らばかり。あるいは病がそうさせてしまうか、賢い子どもは神に手招きされるのか、

「小児病棟は激戦地区だ」「みんな既に死のトビラを開け放って生きている者同士」ある生還した子どもが成人して書き記した言葉「猛スピードで一秒一秒を駆け抜ける」少女よ、アフガン難民もリベリア危機も日本からは遠く、私を含めたおとなは生きるためにもう少し楽しんで、あなたの闘いは容易に理解されないかもしれない。しかし「ただ生きる」こ

との容易に肯定されないこの地平で、あなたの生きる重みは計り知れない。十五年後、たぶんホンコン瞬く熱帯夜で花火、あなたは誰か恋人や女友達と一緒に弾け飛びそうに、白い部屋の記憶を凌駕するほどに、輝いているのだ。

シンogramの画面に星座がトレースされていく。目を覚ますその先でピュアなハートが誰かにめぐり会えそうに撮影台がゆっくりと流れて、またひとつ銀河が描出されていく。正常な像なのか異常な像なのか、いま目を凝らすのは私ひとりで良い。キラキラしたものが大好きなあなたは世界を飾り付けるのにふさわしい。愛する限り、そう、あなたには愛なんて言葉を軽々しく口にして欲しい。

〈注〉

「アジアの純真」

一九九六年に発表された、女性ユニットPUFFYの楽曲。井上陽水作詞、奥田民生作曲。

「北京ベルリンリベリア…」などなど、この楽曲の歌詞を作中に多数引用。

「小児科病棟は…」 「みんな既に…」 「猛スピードで…」

小笠原路子・より子。著 フジテレビ出版 「より子。天使の歌声 小児病棟の奇跡」より。

現在シンガーソングライターとして活躍するより子氏が幼少時を回想する部分から引用。

## 悲哀のすずのね

——堀川正美に捧ぐ9

夏、ひとは青い深淵を戴きながら公園をゆきかう

樹木、白壁、鉄塔、とおくまでつづくガードレールのいろいろを

虚空の貼り交ぜみたいにちりばめて

らでん色の午後はゆつくりとかたむく

水滴を散らしたようにきらめく繁みの陰で

神に遣わされた以外の妖精フェアリーが、子どもにだけ、あるいは

子どもに選った者にだけ、ことばのない、ねむることが不可能な、

めやみみのない、弁膜のひとつない、それら

「絶対者」にだけ、

きれいな悲哀のようにきこえるすずのねで挨拶を送る

坂道をのぼってゆくコロラトウーラ

みずからを狩るために

朝露の森を踏み分けるやかましい鳥刺しの歌

甘いにおいのする夜の女王の座

夏はこんなにも音ねにみちている、みちている

かんべきな静謐をたたえて撓う、あんなにも

青くするどい深淵のしたに

決壊のまえのよろこびの歌がやかましい、やかましい

丘のむこうの見えない海のいろをますます濃くする白い光

たけなわの八月の、おそろしい、白い光

おそろべき乳房、君等は、白刃の光の夏に住む\*

見てはいけない内部として、極彩ごくさい極微の、弥勒や普賢や大日の粒をうかべる

青の虚空として、ゆきとどまろう旅のはずもないのに

坂下の公園では、吹きつける風のなか

きらびやかな鎧をまとったような、重金属のセミの声がゆれ

それよりもさらにたかいオクターブの  
おさない叫びでひかりこもらふ市営プールへ  
突如ひびきわたる休止のホイッスル、そのとき

国道は海にいたるまで水を打ったようにしずまりかえり  
町のすべてはうごかなくなつて

白い国道のカーヴがとりはずされ

かがやく丘がかたづけられ、森ははこび出され

とうに、ワルツはおわつていて、書割の破れ目からのぞいていた

広くむなししい青空だけとなつた世界のひとみに

美しい白髪はくはつの秋がふる、秋がふる

\*おそるべき君等の乳房夏来る 西東三鬼

## 白に誘われて

団地の駐車場へ行こうとしていたら、白い鳥がばたばたと飛んできて、植え込みのなかに落ちた。右に曲がろうとしていたわたしの頭を越えて、左方向の低い植え込みに落ちたのだった。洗濯物とか、紙とかではない。鳥。しかも、野生ではなくて、飼い鳥が逃げ出したもの、とすぐに分かった。

わたしは方向転換して、鳥が落ちた植え込みの方へ歩いて行った。膝の高さほどしかない、ぎざぎざした葉っぱの植え込みを覗きこむと、真っ白いインコがこちらを振り返ってじつとしていて。手を伸ばすとインコは、捕まえてもらうのを待っていたかのように、あつけなくわたしの手におさまった。

何年か前にも、緑色のインコがベランダに飛んできて、洗濯物にしがみついていたことがあった。そのときは、捕まえようとは思わなかった。インコに限らず、そのような場面には何度も出くわしているはずだが、たいていは何もせずにやり過ごしている。大人になつてからのわたしは、そうそう軽はずみには動けなくなっているのである。

それがどうして今回、迷わずインコを追いかけるようなことをしてしまったのか。少年の無垢な心が不意によみがえって、好奇のままに動くようわたしに命じたのだろうか。心身のコンディションによつてはそんなこともあつていいと思うが、わたしの感じでは、インコの白さに誘われたせいではないかと思えるのだ。

もしもインコが緑色だったら、そのまま車へ向かつていたのではないだろうか。普通の色をしたインコなら自然界でも大丈夫、じきに飛び方も遅くなるだろうし、ちゃんと生きていける。でも白はなんだか危なっかしい。かわいそうだ、という気持ちがあつたのか、

なかつたのか。

手の中のインコをそつと握つたまま、わたしは急いで部屋に戻り、空のダンボール箱を引つ張り出してきて中に閉じ込めた。途中、嘴でわたしの手をつついていたが、暴れて逃げようとするような抵抗ではなかつた。

それからまたすぐに駐車場へ引き返し、鳥かごと餌を買いに、近所のホームセンターまで車を走らせた。その先のことをまだ何も決めていないのに、なぜかそこまで、迷うことなく決断したことになる。

決断といえ、ちよつと横道にそれるけれども、まだ青年だつたころのある日、ある都市の地下街をわたしはひとり歩いてきた。

そして、大きな用を足そうとしてトイレに入ったところ、目の前に財布が置いてある。便器に座ってから手に取つて覗いてみると、大きな札が何枚か入っている。ほかにもいろいろ、分厚い財布なのだ。落としたのほやほやに違いない。そのまま財布を持って出て警察に届けばいいものを、持つて出るといふ行為に疚しさ（誰かに見咎められるのではないかと不安）を感じて、用を足し終わつて地下街に戻つてからガードマンを見つけ、財布が落ちてますよ、と教えたのだった。ガードマンと一緒にトイレに戻つてみると、当然といふべきか、すでに財布は無くなつていて、そこへ落とし主が息を切らして現れた。「給料が全部入っていたんです」がっかり肩を落とし、恨めしそうな目でわたしを見つめたあの目を忘れることができない。おおむね、決断力のない人生をわたしは送っているのである。

決断するしないで、その人と、しばしばその人でない人の運命が大きく変わる。悪い方に転んだり、いい方に転んだりするのは分か

りやすい稀な例で、どっちつかずの方向に転び続けるのが人生だ、ということもできそうだ。

決断と言えるほどの意志はどこにもなかったけれども、インコに手を伸ばした行為は、わたしとしては珍しく機敏な転び方だったのではないかと思う。

白い環境のなかで生きている白い生き物は、けっして弱くは見えない。そうでない環境では、白い生き物はたしかに目立ち過ぎる。けばけばしい自己主張の色の目立ち方とは違って、いかにも排除の対象になりそうな目立ち方なのだ。だからかわいそうで、保護しようとした、とはやっぱり思えない。他の理由がなにかあるはずだ。と考えるのは間違いで、理由がないから動けたのかも知れない。理由のないままことを行なうのは珍しいことではないし、とりあえず、理由のない行為のひとつにインコ捕獲行為を入れておこうと思う。それにしても、理由がないように、この先の展望もないというのは困ったものだ。

インコとは関係がないが、白い色についてこんな経験をしたことがある。

知人に頼まれて天井張りをしたことがあった。白い石膏ボードにぶつぶつ虫食いの穴が開いた、ごく一般的な天井材だが、張り終わって何ヶ月か経ったとき、猫が天井に入り込んで穴を開けてしまった、小便をして染みもつくってしまった、なんとかしてもらえないかという電話があった。丸ごと張りなおすのは経費も労力も大変だし、二三枚だけ交換というのもわたしの技術力では難しい。それで、石膏で穴埋めをして、白い水性ペンキでも塗ってごまかそう、ということになった。

なんとかなるつもりで作業を始めたのだが、わたしの作った白が地の白になかなかなじんでくれない。緑を混ぜ、黄色をませ、また白を足し、今度は茶色を垂らしてみたりして、いろいろ工夫するのだが、近づくどころかますますわけがわからなくなってしまう。柔らかさと硬さのほどよいバランスの上で成型されている製品なので、素材じたいをいじくる

難しさもある。

ふと思いついて画家の友人に頼んでみることにした。

「この色を、水性の絵の具かペンキでつくってみてくれないか」

山の中にあるアトリエの庭にしゃがみこんで、友人はちよこちよこと筆を動かし始めた。

「木村くん、ちよつと見てくれるかい？」

しばらくして、画家がわたしを手招きする。

「どこに塗ったか分かる？」

近づいて、サンプルを覗き込んだ。手にとって光の角度を変えてみる。白の地に白を塗った筆のあとが幾つか判別できる。その中でもほとんど地の色と見分けがつかない、とてもよくなじんでいる箇所をわたしは指差した。さすが、画家。文句なし、これなら大丈夫。「やっぱり分からないか。そこじゃない、ここだよ」

してやったり顔で友人が指差したところは、まったく手を加えていない、地そのままに見える部分だった。サンプルをふたたび光にかざして確認すると、たしかに塗ってあるように見えるが見えなくもない。

その白色を瓶に詰めてもらって、勇んで現場に戻り、わたしはごまかしの作業を続けることができた。

白という言葉があるから白という色がある。白という言葉がなければ、白という色もない。白という言葉があるにもかかわらず、わたしは白という色をつくり出すことができなかった。画家の友人がつくった白も、厳密には、白を囲む世界を感受する力が創りあげた、白そのものではない実在するなにかだったと思う。

ところでインコは今もまだ、そんなに広くはない、仮住まいの鳥かごの中で居候をつづけている。誰かに飼われていたのは間違いないようで、手にすぐ乗ってくるし、かごの外に出すと、わたしの肩を主たる止まり木にして、耳たぶをつついたり髪をひっぱったり、いたずらをする。肩に止まらせたまま、部屋から部屋へ移動しても平気な顔をしてい

る。わたしの指の爪に嘴をぶつけながら、ぶつぶつと、声色を変えてなにやら喋り出すこともある。

最初は全く気づかなかったのだが、そのインコはじつは純白ではなくて、ブルーのようなグリーンのような色が、翼でない背中の中にじみ出ている。光の加減で、そんな色が浮き出して見えるのである。肌の色が透けるのか、それにピンクが混じることもある。

白という運命を背負わされてはいるが、画家がつくった白と同じように、白ではない他の色を生きているということだろう。白という言葉など本人は多分知らないだろうから、白に気兼ねする必要もないだろうし。

## ことば以前の声

何を書こうかと頭を抱えていると、猫のもつぷが足下を通り過ぎていった。隣室へのドアのところ腰を降ろすと、こちらを振り返って「にやあ」と言う。これが意味するところは全く明らかであって、僕は立ち上がってそのドアを十五センチほど開けてやる。

この間のやりとりはごく円滑なものであり、当事者としてはほぼ完全に意思の疎通が行われたという実感を持ちうるものであった。そのやりとりの中心に「にやあ」があり、それはほとんど、「ドアを開けよ」と聞こえるものだった。

しかしながら、「にやあ」をどう分解しても、その中には「ドア」も「開く」もないのであった。だいたい猫に操作すべき「もの」が見えているのかどうか。私たちが知り、定義している「ドア」というようなものはたぶん知らないのだろう。目の前にある道を塞いでいる何か板状のものというようなものは見えていないのだろうけれど。

「にやあ」の一声は、何かで行く手を阻まれて大変困っているという、もつぷがおかれた状況について注意を喚起し、同時に「これをなんとかせよ」と、僕に命令しているものだと思えることができる。

それを聞く人間の方も、その状況を理解し、なんとかしてほしいという猫の願望を理解して、その上で打開策としてドアを開けるといふ選択肢を見いだし、ドアを開けるのだろう。それがほぼ一瞬のうちに解釈され、行われるので、ほとんどなんとなく、「にやあ」を「ドアを開けよ」とまっすぐに結びつけてしまうのだろう。おそらく「にやあ」そのものよりも、シチュエーションの提示と読解がことの本質なのだ。声はそのきっかけに過ぎないのかもしれない。

こう考えてくると、猫がドアの前で困惑しているという状況の方が大事で、「にやあ」は単なる合図であるかのように思われてきってしまう。でもそれはどんな声でも物音でもよかったのだろうか。やはりその瞬間には、この声以外にはありえなかったろうという、そういう声で、もつぷは言ったように思うのだ。声そのものの強さ、発語している間の高低の変化、リズムといったものに込められた、そのひとときならではものが、そこにはあったように思う。

猫であれ犬であれ、うれしそう声、悲しそう声というのがある。怒っている声もあれば狼狽している声もある。その命がその声に、その瞬間限りの固有の色を与えていく。それはその命の何かのあらわれとして、僕たちの内に了解される。

ドアが閉まっているということ。猫が通れないということ。それが僕の傍らにあるということ。これらは世界にばらばらに配置された、お互いに関わりのない出来事だった。これら同士が出会わずに済むこともあったのかもしれない。それを一瞬のうちに縊りあわせ、一まとまりの事件にしたのは、もつぷの「にやあ」だった。この「にやあ」がなければ、シチュエーションというものも立ち顕われなかったに違いない。もしかしたらこれは奇蹟に近い出来事だったのではないか。よびかける声には、そういう風に次の行動のために出来事を結びつけ、まとめあげていく魔法があるのかもしれない。そのことと、声に秘められた一瞬の命というものは、たぶん関係があるのだ。

ドアノブを握ってそんなことを考えていると、もつぷは僕の方を一瞥して、隣の部屋へ消えていった。

声はいつもなにか、外側のものと関わっているのだろうか。コップとか、ドアとか、呼びかけるべき誰かとか。

言葉というものはそうなのかもしれない。自問自答というのものもあるけれど、それも他人としての自分に訊いているだろう。他の人、他のものと関わっている。

声はいまや、その言葉に隷属するものであるようだ。僕たちは既に無意味に発声するということをしない。不意に「あっ」とか「うー」とかいう音が口から漏れることがあるが、それすら言葉から自由ではない。「間投詞」とか「感動詞」という名を与えられ、それは口から進み出てくる言葉の隊列に強制的に入れられてしまう。

日常の中で意味をなさない声を延々と出し続ける機会というのはほとんどないと言える。だがまったくくないという訳ではない。

前にも書いたことがあるが、トウバ共和国の倍音唱法「ホーメイ」にすっかりはまってしまった、昼夜を分たずに練習をしているのだ。これは、口腔の中で複雑に声を共鳴させて、二つ、あるいは三つの声を同時に操る技術である。名人は人間の限界を超えた超低音から可聴域を超えた高音まで出す。

ホーメイの修行は、自分自身の声の中のさまざまな響きを聴き分けるところから始まる。これまで気付いていなかったいろいろな音が、声の中にはすでに含まれているのだ。その中のある成分を丁寧に育て上げていくのである。眼をつむって自分の声の響きに集中していると、口の中に海があるような気がしてくる。それまでの実用では気付かれなかった広がりや深さが見えてくるのだ。咽頭、口腔内で高次倍音を共鳴させ強調するためには、声帯から供給される声そのものが、豊かな倍音を含むものでなくてはならない。これは普通の人や聴けば「だみ声」としか聞こえないものだが、だんだんその中の輝きの粒子のようなものが見えてくる。砂金のような輝く粒を含んだ奔流が身体の奥から湧出していて、口腔を

変化させるとその輝きが変わる、という感じだろうか。そしてその響きの中から、別の声や顕現する瞬間には、何か宗教的とも言えるような戦慄がある。

何か新しい技を身につける時は、自分の外の高いところにあるものに手を伸ばす感じがあるが、このホーメイに限っては、自分の内奥に降りていく感じがする。そして内側で誰かと出会うのだ。

最近道歩いているときも、知らず知らずの内に「うー」という声が口から漏れていることがある。道ゆく人は誰も僕と眼を合わそうとしない。家では子供たちから気味悪がられる。意味のない声というのは、言葉の世界に生きる人達には異様なものなのだろう。だが、言葉と非言葉の間に立つことによつてしか見えないものも、どうもあるようである。

これまで、詩は名づけだと思ってきた。目の前に現れた謎を、言葉に置き換えることが詩だと思ってきた。だがこのところ、それ以外の詩のありようというものが気になってきている。猫の一声が世界をまとめあげる瞬間や、喉の奥の未知の音声のきらめきの中に、言葉以前の言葉が透けて見えるような気がするのである。それをまた、言葉にすることはできるのだろうか。そしてそれは詩という形をとるのだろうか。

## 蕉句二つ

芭蕉の句にこんなものがある。元禄六年（1693）、死の前年の吟だが、死の句いなど微塵も思わせない。

菜根を喫して終日丈夫に談話ス

ものゝふの大根苦き（別に、からき）はなし哉

あるいはさかのぼって貞享五年（1688）にはこんな句がある。芝居の舞台で役者を見、翌日にその訃報を聞いた折の作。

俗士にさそはれて、さ月四日吉岡求馬を見ル。

五日はや死ス。仍而追善。

花あやめ一夜にかれし求馬哉

両者を読んで気がつくのは、二句とも同じ表現構造の文であることだ。必ずしも修飾・被修飾というのではない。上から読んでいって対象的な世界の積み重ねと判断できる叙述のすえに、卒然としてそれらが譬喩であったことを明かされる。ものゝふの句で言えば「苦き（からき）」、花あやめで言えば「かれし」が蝶番のように反転して、それ以前の叙述をいきなり譬喩にしている。まるで、メビウスの環をくぐりぬけるように。

芭蕉の作の中ではあまり多くはないこういつた構文は、しかしそれ以前の勅撰和歌集や私家集、歌物語において数限りなく作られてきたものなのだ。ここで後生のようなたくらみのいちばん少ない万葉集の作例を見てみる。

1 秋の田の穂の上に霧らふ朝がすみいづへ  
の方にわが恋ひやまむ 磐姫皇后

2 秋山の樹の下がくりゆく水の吾こそ益さ  
め御念よりは 鏡王女

3 見渡せば明石の浦に焼ける火の秀にぞ出  
でぬる妹に恋ふらく 門部王

4 阿倍の島鶉の住む石に寄する波間なくこ  
のころ大和し思ほゆ 山部赤人

芭蕉句の「苦き」や「かれし」のような句は、たとえば1では「いづへの方に」であるし、2では「水の：益さめ」、3では「秀にぞ出でぬる」、4は「寄する波：間なく」だといえるだろう。それまで景物や現象のあいだをさまよっていた叙述が、それらの一句をもつて突然心の可視的狀態になったことがわかってくる。いや、対象を持たない心と、心の裏付けのない対象とが、下の句の終わりに至って一挙に結び付く、と言ったらいいか。もつとも、心の裏付けのない、とは言っても、積み重ねられてゆく対象的な叙述は心の周りをぐるぐる回っているのだ。3の明石の浦や夜に漁夫の焚く火、4の大和から遠く離れたじぶんにはよそよそしい阿倍の島の鶉など、心に関係のありそうな景物や現象をしいだいに引き寄せている。そうしたうえで、キーとなる句をギアのように入れて心をいっばいに開放させるのだ。

古く、和歌や歌謡がどんなに客観的な叙述に終始しているように見えても、何かしらの諷喩であったり、同じことだが、神意を伝えるものであったりしたことで、これは関係している。客体としての歌というのは考えられない。それがどんなものであれ、歌の裏側には心がびったりと張りついている。まるで、沈黙が張りついているように。あたかも、「神」の受容体のように。和歌の始めであるとされる「やくもたついづもやへがきつまごみにやへがきつくるそのやへがきを」の歌が、なぜ意味もよくはわからないのに、かくも長い間

尊重され伝承されてきたのか、そこにある人々が感じた託宣という側面も無視できないのではないか。われわれは「歌」を前にするとき・読むとき、歌へ指向する何らかの「心の状態」ではいるのだ。

この心と景物はやがて二つの方向に分かれてゆく。ひとつは、景物が一首の全体を覆うもので、「恋ひやまむ」や「思ほゆ」等で心を開放させることなく、景物自体が心と同義となったもの。言うなれば、心は景物のうちに密封されることになる。たとえば次のような歌が考えられる。

5 もののふの八十字治河の網代木にいさよ  
ふ波の行方知らずも 柿本人麻呂

6 四極山うち越え見れば笠縫の島こぎかく  
る棚無し小舟 高市黒人

7 縄の海ゆ背向に見ゆる沖つ島こぎ廻る舟  
は釣をすらしも 山部赤人

これらの歌の末尾に「恋ひし」とか「悲しも」とかを接続して心を開放させると、たちどころに一首の全景物は心の譬喩になるだろう。ただしそうしなければ、いつか「やくもたつ」のような託宣の味わいを、これらの歌は持つに至るような気がする。いや、歌というものはすべて、心と意味をつかむ術が瘦せれば、託宣のような形をとって残存するものなのかも知れない。他方、はるか後のはなしになるが、近代的な叙景歌や写生句なども、その秘密を、ここいらへんにまで辿ることができるのではないだろうか。

もうひとつは景物をほとんど振り捨てて、心のみを述べる形が考えられる。景物が無くてどうして歌が成り立つのか。じつは、心は自分自身を対象として、歌を成り立たせるようになるのである。心は当の心自体を景物のように扱うことで歌を成り立たせる。以下の作例にその形が見られる。

8 生者つひにも死ぬるものにあれば今ある  
間は楽しくをあらな 大伴旅人

9 ゆふ畳手に取り持ちてかくだにも吾は折  
ひなむ君にあはじかも 大伴坂上郎女  
10 遠長く仕へむものと思へりし君いまさね  
ば心神もなし 作者不明  
11 夕さればもの思ひ益る見し人の言問ふす  
がた面影にして 笠女郎

このなかで8が最も後世的というか近代的な形で、万葉集のうちではまず例外的な作例（の一群）なのではないか。残り三つは、9は一族の刀自である郎女の重要な為事である神事に関する歌であり、10は8の作者の大伴旅人の薨去に際しての挽歌群の一、11は恋歌である。いずれもいわば「魂のありか」をめぐる一首が成立していることが注意されていい点だ。これが古今集からこつちになってくると、さきほど述べた蝶番の句の使い方が違ってくる。

12 昨日といひけふとくらしてあすか川流れ  
て速き月日なりけり はるみちのつらき

13 世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵  
ぞ今日は瀬になる 読人しらす

あすか川がこの場合の蝶番だが、あすか川を挟んで、前と後ろとで何かディメンションが決定的に変わったという印象がない。下の句にしても素直な心の放出ではなく、二重にも三重にもその奥にたたまれたペルソナを感じるのである。しかし、しゃれてはいるとはいえ、咒言とまったく無縁でもない。もっと行けばいわゆる「俳諧歌」となるものだ。こういう言い方を進めるなら、そう、あすか川は現代のわれわれの言う駄洒落なのだ。言を左右にするみたいだが、もつと言わせてもらうなら、木や鳥に神意を見たり、はるばると広がる峠越しの海景に家郷を思ったり、山の隠れ水や田の上の朝霧にも思いつくこと、それらを譬喩とすること、駄洒落の淵源はそこに求められる。じつさい、神話作用の中ではコトバはほとんど同音・同義の触手でもって動くと言っている。以下の折口信夫の述べ

るところに（現代の評価がどうであれ）、われわれはもつと驚いていいのではないか。

「なつき」は、狩猟時代の食用のなごりで、脳味噌の名として残つてゐる。「かみなつき」に対して、「しもなつき」が略せられてしも月となり、みなつきも、かうしてなり立つたといふ考へも出来る。すると、なつきは、収穫前に、神の為に山幸を献る式及び占ひともとれる。神に供へる為の山獣の頭がなつきで、その時期がなつきからなつになつた（と）すれば、五月の猟の原義も辿れる。「なつきの田のいながらに……」の大歌を見ても、さうした式場が、田であつた事が思はれよう。第一回のなつき祭り、即御頭祭りが十月頃で、第二回の分が、後専ら行はれたさつきに近いみなつきで、みは敬語、なつがなつき祭りの略だ、と知れる。（「霜及び霜月」全集第十五巻198ページ）

こんなものを読むにつけ、ちよつと考えつくだけでも、御霊思想などというものがほんとうはどんなところからやって来たのか知らないが、菅原道真にもつとも関係が深いはずのこの御霊が、ゴリヤウとゴラウの音の違いを易々と乗り越えて、片眼の武将・鎌倉権五郎景政のゴロウに引き寄せられたり、曾我兄弟の五郎時致、また佐倉の義民・惣五郎のゴロウに引き寄せられたりと、コトバは思わぬ動き方をするものだとつくづく思う。折口の論は、ふだんわれわれが信じていると思しきことどもがいかに儂くひっくり返るものであるかを、緻密に、まざまざと見せつける。おそらく、いままで作例を挙げた「蝶番」による脱臼的な感覚は、あるいはこんなところに理由を持つているのかも知れない。

心が自らを求めて対象の周りをぐるぐる回る形から、心を景物に密封した形、心自身を景物にして詠まれた魂にほど近い歌を経て、あすか川のソフィステイケートドされた形に至る道筋は、中世にたどり着き、ある部分は地下歌のほうから自らの身を割ってゆく。

連歌、そして俳諧へ。

私の印象に過ぎないが、芭蕉の二句にはその中にミニチュアみたいな姿で、「歌」がかりよめの再生を果たすような姿で保存されている気がする。その、内なる「脱臼」は重厚でたけ高い。歌と異なるのは、歌がまがりなりにも自分自身の心の放出を伴うとすれば、芭蕉句はどんな場合にでも、自らの心でさえ、「底意」をもつて見つめられている点であろう。いわば俗諦に対する真諦という意味での底意だが、それは芭蕉においてこんなふうな捉えられ方をしている。元禄三年、加生（凡兆）が考えた俳文について、それをほめ、ついでには自分にそのアイデアを譲つてはくれまいか、と、まあ今ではとても考えられない、しかしいかにも伝統的な俳諧者らしい持ちかけをしている、その書簡から引く。

僧鳥之文御見せ、感吟いたし候。乍去、文章くだ、敷所御座候而、しまりかね候様に相見え候間、先、他見被成まじく候。殊外よろしき趣向にて御座候間、拙者文に可致候。もし又是然（非）と思召候は、拙者文御覽被成候而、其上にて又御改可被成候。文の落付所、何を底意に書たると申事無御座候ては、お（を）どり、くどき・早物語の類に御座候。古人の文章に御心可被付候。此文にては鳥の伝記に成申候間、能と御工夫御尤に存候。（元禄三年九月十三日付『芭蕉書簡集』岩波文庫版）

ここで言われている「おどり・くどき・早物語」のたぐいに神がいなというわけではない。そのことを、柳田国男や折口を経巡ってきたわれわれはよく知っていると思う。だが少なくとも神とともにいた歌は、俳諧となつて神を失い、代わりに底意というメタフィジックを得たのだ。俳諧歌の系譜を引くともいえる初期俳諧の、すさまじいばかりの地口・駄洒落の世界をどう考えたらよいのか。私が見るところ芭蕉は、しかしそれに反し、神とも何とも言いがたい超越的な領域を、鋭敏に検知する器官を確かに具えていた感じだが。

荒川修作の「養老天命反転地」へ行ってきた。けれども、かの領域の、ねじれては不穩に挑発する力さえ、近くを落ちる「養老の滝」のマイナスイオンによって、その裾をぐっしり濡らしてしまう。気温39度。終戦の日の岐阜だった。(後藤)

電気工事士試験に受かりました。われながら、人の何倍も努力したかもしれない7ヶ月だった。なんせ、もたもたとしているもので。けれども、面白い人生だった。(木村)

暑い夏だった。暑が出る頃には、暑さがひいているか心配になるほど。地球環境そして人体の方にも何か訪れているような、危機が身体の次元に及ぶ感じがした。そんな中、通信教育のスクーリング、レポートと勉強の夏であった。その後何か気散じになる本はないかと思つて、いいいいんじ『ぶらんこ乗り』を読んだ。ファンタジーの系列に入るとも思えるが、ひさしぶりにフィクションを読む面白さというのを呼び覚ましてくれる本だった。物語るという言葉は奥深い言葉で、そこには無限の豊かさがあると思う。いしい氏の小説は、のんきなように見えて、何かからだの奥を少しざわざわさせてくれる。でも、まだ僕には物足りない面もある。もっとざわざわに出会いたいな。(石川)

京都に住んで、詩を書いたり朗読したりしています。

これまでには、ウエブ女流詩人の集い「蘭

の会」、詩誌「ミニフミ」「紫陽」などに参加をしています。二〇〇四年に第一詩集「ミドリソング」をポエトリージャパンより上梓致しました。

鈴川夕伽莉というのは筆名です。鈴川という姓は学生時代、母校の教室職員さんから拝借しました。クレヨンしんちゃんそっくりのおっちゃんです。しばしばコンビニで雑誌のグラビアを立ち読みしており、現場を学生に差し押さえられてはエヘと笑うような、非常にキュートな方でした。私は当時、出会う人の多くに「とっつきにくい」と思われ、寂しかったので「鈴川さんのように皆に愛されたい」という願いを込めて筆名を決めました。それが叶ったのかどうかは分かりませんが、こうして「鈴川」のお仲間に入れて頂け、とても嬉しいです。今後とも、よろしくお願い致します。(鈴川)

僕は六畳間に住んでいます。以前はiMac をケーブル ADSL モデムに繋いで使っていました。MacBook を新たに購入したこともあって、無線 LAN を張りました。それがほぼ半年か、一年前の出来事です。現在、iMac は腐海に沈み、全くアクセス不可能になりました。幸い、無線 LAN を張っておいたお陰で、腐海から頭をちょんと出した iMac を遠くに眺めながら、MacBook でかろうじてネットに繋がっています。

iMac は 20" Early 2006 で、一番最初に Intel の CPU を搭載した、記念的な Macintosh です。Apple にとっては、実験的な意味合いがあったのかも知れません。部屋が少し片付いたら、また iMac を使い

たいと思つていますが、何しろイブシロン（コンピュータ用の椅子です）が横置きになつてゐるような部屋なので、片付けるとなると、かなりの労力が必要になると思われます。散らかつてゐるとはいうもので、すべて大切なものばかりなので、棄てることは出来ません。More に加えてただ一つの家財道具である本棚を、機能させる時が来たようです。（野村）

九月になつても暑い日が続く。日向にいと気が遠くなるようだ。街中のいらだちが少しづつ水位を上げ、しらじらと光り出す。それが、ねっとりとした空気の中にいつ吹き上がりこぼれ出すのか、汗にまみれながら見上げている。川が溢れるのは、昔は仕方のないことだったが、今では河川管理者の責任だ。今や何もかも、人間が責任を取らないといけならしい。これは人間が偉くなつたということなのだろう。立派な社会人の世界。背広を着た神様たち。吹きこぼれる暑さの責任者は誰か。眼に入るもの全てに責任を言い募る人々の群れに、ますます気が遠くなる毎日だ。（高野）

テレビを点けたら、ギヤ・カンチェリの新曲をやつてゐた。ギドン・クレームと彼の楽団「クレメラータ・バルチカ」。くやしい事に、前半のマーラーもシヨスタコービチも聴き逃して、プログラムはもうピアノラしか残つていなかった。

「ブエノスアイレスの四季」。  
むかし、田端義男の持ちビルの地下に、アルゼンチン料理「アルベルトさんの店」というのがあつて、主人のアルベルト氏はピアノラを毛虫のように嫌つてゐた。なるほど、と合点のいくその理由を思い出しながらも、テレビのピアノラの極北的な編曲

に、思わず心をうばわれたのだつた。

verano porteno — ブエノスアイレスの夏、  
otono porteno — ブエノスアイレスの秋。  
（和田）

高野五韻さんが京都から出てこられてきて、横浜でお会いして話をしたことがあつた。彼の出京は仕事だつたのだが、それは横浜は都筑区の茅ヶ崎（湘南のではない、港北ニュータウンの）にある幼稚園だか保育園だかのランドスケープに関するものようだった。都筑の茅ヶ崎は、昔調べたことのある杉山神社があるところで、神怪こそないが深い謎に満ちたそんなところに新住人の子どもたちが跳んだり跳ねたりする、しかも「自然」という思想とぬきさしならぬ関係を持つ新しい考えをひめた施設があるということは、私にとつてひとつの感慨を抱かせるものであつた。

そんな仕事帰りの五韻さんがぼやいていたことがある。あるプレゼンなり発表なり報告書なりを提出するとき、わかりきつたことでも、またちよつとそれは考えにくい、重箱の隅をつつくようなことでも、必ず「証明」とか「数字」「数値」を要求されるということだそうだ。極端な場合、それを証明するために、ぴつたりと合う数値をサーチすることだつてあると思う。五韻さんがここで言いたかつたのは、数字をないがしろにすることではなく、数値偏重の持つ不健全さなのだとは理解している。

言い換えれば、逆に数値を積み上げていつて世界を再構成できるのかどうかということだ。それができつこないということとは、たとえば世界を構成する整数1と整数2のあいだには、どんな「数字」だつて入つてしまえること一つとつてみてわかることではないか。

いいかえれば、世界のあらゆるところに

隙間を見いだすこと、一切は空間(≡数値)化されうるということ。ゼノンの矢の軌跡みたいに永遠に分割され続ける世界が唯一のものであるという思想……。

だが、いま世の中を覆っているのはこうした、世界はすべて数値化できるという考えだといえる。問題は数値に現れている現実なのであつて、たとえばその疾病の解決には数値ではなく、それを数値として浮き上がらせている現実のほうに手を加えなければならぬはずである。数値はあくまで指針であり、研ぎ澄まされるべきは、具体性への感覚と構想力だと思ふ。

現在、世界を制覇して勝利の雄叫びを上げている、英米を中心とした論理実証哲学は、もともとウイトゲンシュタインなどもその始祖のひとりなのだが、よもやこんな退廃と混乱を生み出すとは、ご当人たちは思つてもみなかつたに違いない。ウイトゲンシュタインは一種の無のうえで世界を分割し、演算し、舞踏し、結局哲学のすべての問題は言語の問題にすぎないと繰り返して指摘したのだが、現在世界を制覇している思考は、ちようどその無であるべき領域を、反対に征服し、所有しうる「有」と見なし、て全世界を刈り込んでいる。

石油の次は食糧や水、食糧や水の次はわれわれが息をする空気まで対象にしたバクチを開帳するに違いない。人間は神がいないとこんなにもダメな存在であるとは、われらがウイトゲンシュタイン先生も草葉の陰であきれておられることだろう。(倉田)